
ひぐらしのなく頃に～皆守り編～

S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に〜皆守り編〜

【Nコード】

N0712Y

【作者名】

S

【あらすじ】

鷹野と戦い敗れた梨花。

この世界で羽入は運命と戦う覚悟を決める。

そして、ここに運命と戦う為の最後の駒が揃う。

最後の世界で最後の戦いが始まる。

一話 始まり（前書き）

こんにちわ

不定期更新で始まります。

駄文ですがよろしく願います。
では、始まり

一話 始まり

「……今まで良く頑張ったな」

とある家の玄関にて一人の少年が背中を向いている少年に尋ねた。
尋ねた少年の目はまるで戦争に行く家族を送るような表情だ。

「ああ、守らないといけない人が居るから……」

「そうか……頑張れよ」

「ああ……そろそろ行くよ、弘輝」

その表情は本当に神々しく彼を止めることを許される人間はこの世には存在しないと言わしめる物だった。

弘輝と呼ばれた少年はそれを分かっていたからこう言った。

「頑張れよ……陸」

陸と呼ばれた少年はそう言われてその家から外へ一歩踏み出した。

一週間程時間が戻り雛見沢

「っ！羽入！今日はいつ？」

梨花が起きてまず言った言葉はそれだった。

前の世界で鷹野に殺された記憶はある。

これで自分の前にある運命と言う壁を壊せる可能性は高くなった。

「今日は五月の二十九日なのです！」

先程までどこにも居なかった所に角の生えた少女が現れた。
彼女が羽入である。

梨花と共に百年間運命と戦って来た相棒である。

「まだ三週間はあるのね……」

「はい！ところで梨花。

僕は運命と戦う為に実体化を行うのです」

それを聞いて梨花は驚いた。

実体化は羽入の中では禁術。

それを行うことは自分の神としての能力を捨て去ると言うことだ。

「あなたも運命と戦う覚悟を決めたのね……」

それに羽入は静かに頷いた。

「分かったわ。

どれくらいかかる？」

「分からないのです。

でも、頑張るのですよ！」

「ええ、頑張rinaさい」

その時二人は知らなかった。

運命と戦う為の役者がもう一人ここに来ていると言うことを……
その駒こそ運命を打ち破る為の最高の駒だと言うことを……

一話 始まり（後書き）

さて、今回出て来た『陸』というキャラですがひぐらしを裏の裏まで知っている

方なら知っている方が居るかもしれません。
では、また次回です。

11/03日修正しました。

二話 二人の転校生（前書き）

こんにちわ

これから物語の日にちが変わる毎に日にちを書きます。

この方が物語の時間軸分かりやすいですからね。
では、始まり

二話 二人の転校生

六月六日

圭一SIDE

「皆さん、今日は転校生を紹介します」

『おおおおっ！』

知恵先生がそう言ったことにより教室内のテンションが一気に上がった。

転校生が来るのは前から決まっていたことだ。

「それと転校生は二人です」

前から決まっていた転校生は一人だが急にもう一人転校生が出たのだろう。

だが、それでも俺達が歓迎するのは変わら無いけどな。

「では、入ってきてください！」

知恵先生がそう言うのと転校生が扉を開ける。

ああ！そんな不用心に扉を開けたら！

ビュンッ！

風を斬る様な音がしてボールが開けられたボールに向かって飛んで行く。

教室内に居た全員は転校生に当たることを予想しただろう。
だが……

パシ！

『！？』

転校生はボールを取っただけらしい。

「下がってる」

良く聞き取れなかったが転校生のもう一人の転校生の名前を呼んだ
んだろう。

どうやらお互いに知り合いの様だ。

入って来たのは少年。

俺と同じ年の位だろう。

転校生（これから少年と記す）は足元を見る足元にはロープがあった。
つた。

その先に硯があった。

「ふう……やっぱりお前を先に行かせてたらヤバかったよ。
入ってきて良いよ。足元には注意して」

少年がそう言っていると少女が入って来た。
めちゃくちゃ可愛い。

「あううう……緊張するのです……」

「ははっ、俺も少しは緊張してるよ」

少年はそう言々と生徒全員に向かって自己紹介を始める。

「古代 陸です。」

以後お見知りおきを」

そう言つて陸と名乗つた少年は頭を下げる。

すごく礼義正しい少年だ。

自己紹介をした後陸は少女を前に出す。

少女に自己紹介しろと催促しているんだろう。

「あううう……古手 羽入なのです……」

梨花の遠縁の親戚なのです……

よろしきゅ……よろ……よろ……よろしきゅお願いしゅなのです!」

『おおおおおおつ!』

羽入と名乗つた少女は名乗ってから陸の後に隠れた。

知らない人よりも知り合いの方がやっぱり良いんだろう。

「皆さん、何か質問はありますか?」

「はい!」

流石魅音、素早く手を上げる。

「二人は付き合ってるんですか?」

流石にからかってやってるんだろう。
だが羽入の方は顔を赤らめている。

「あううう……」

その反応を見て陸の方は観念した様に言った。

「羽入は俺の婚約者です」

『……………はい？』

皆聞き間違いだと思って皆聞き返す。

何故か陸は羽入の耳を塞いでこう言った。

「だから羽入は俺の婚約者です」

『はあああああああああああああああつ！？』

余談だけどこの日震度二の地震が難見沢で観測されたらしい。

「つまり二人共結婚の約束してるの？」

俺達が叫んでからしばらく二人は質問責めにあっていた。

気の弱い羽入に代わって殆んど陸が答えているが。

「まあね」

因みに先程陸はさつきから羽入以外には警護で話してたから魅音が

『もう敬語で話すのやめなよ』と

言ってタメ口にさせた。

「いつ結婚の約束したの？」

「秘密だよ」

人差し指を口の前に立てて教えないと言う様な表情をしている。

「ええ〜〜！良いじゃんケチ〜〜！」

余程教えて欲しかったのか文句をブツブツ言っている。

「皆さん！そろそろ授業を始めましょう！」

知恵先生がそう言って授業が始まった。

陸SIDE

授業の内容は授業と言うよりも自習だった。

確か……圭一（だったか？）や知恵先生が生徒達に教えて回っている。

俺と言えば……

「だからな、羽入。

ここは……」

羽入の専属教師をしている。

昔羽入はもつと聡明だと思っていたんだがな……

まあ、時間が流れば人は変わるんだろう。

俺も昔と比べれば相当変わった。

「陸、こつちも手伝ってくれ！」

奥さんの勉強ばつかじゃなくてさ！」

「分かった。」

じゃあ、俺は梨花さんと魅音さんを見るから。
レナさんと紗都子さん頼めるか？」

「分かった！」

そう言つて羽入に断りを入れてまず魅音の勉強を見る。
そこで俺は固まってしまった。

「これ……中一の勉強じゃないか……」

さつき確か案内の時に知恵先生が

『この学校の生徒の中であなたともう一人同い年の生徒が居ます。
あなたが二番目に最高学年ですからキチンとしてくださいね』と
言った。

つまり、俺より上の学年は三年や高校生となる。

だが、この学校には高校生は居ない。

だから最高学年は中三になる。

魅音の身長からして彼女が最高学年だと推測出来るが……
何でその彼女が中学校一年生の勉強をしているんだ……

「ははは……！私は本番でかつ飛ばすタイプだからね！
大丈夫だよ……！それよりどうしたのかな？こめかみを押さえた
りして」

こいつ……！

一度現実を見せた方が良いか……

「次の文中で主人公が思ったこと喜怒哀楽の内の一つを答えろ。
『その街を歩いていて少した時だ。

私の仲間が道端に落ちている人形に歩み寄った。
恐らく戦争で亡くなった子供の物だろう。

仲間はその人形を抱いて涙を流して謝った。

『私達の起こした戦争の所為で……ごめんなさい』
その言葉を聞いて私も涙を流した』」

簡単な問題だ。

小学五年生の時に塾で出された問題。

これが分からなかったらこいつは……

「怒」

小学生五年生以下だ！

「圭ー！こいつは受験を諦めた方が良い！」

「え！？何でさ！？」

「当たり前だろ！

何で何で怒ったんだ！自分も涙を流してるだろうが！

答えは哀だ！」

これで『愛？』とか聞き直したら俺は……

「愛？」

「圭ー……俺は頭が痛くなった……

俺は別の人を教える……」

俺はそう言いながら頭を押さえて梨花の所に歩いて近づいた。

「よろしく……」

「よろしく願いしますなのです。にぱ」

警戒してるな。

そんなことは隠してるけど。

一応俺が味方だって言うことを教えておくか。

「どこが分からないかな？」

「ここなのです」

「ああ、ここは……」

俺はそう言ってノートに解法を書く振りをしてこう書いた。

『惨劇のことは羽入から聞いた。

俺は味方だ。惨劇を打ち破る為に協力する。

後で校舎裏で羽入を含めて話そう』

それを見て梨花は少し驚いたような顔をしたが梨花はすぐに頷いた。

そして休み時間校舎裏

「それで？古城 陸。あなたは何者なの？」

羽入の婚約者とか言ってるけどそんなことはありえないわ。

羽入は大昔から人には姿が見えない状態だったのだから」

校舎裏に来て一番最初に梨花はそう言った。

「なあ、俺が大昔の人間だって言うことは考えないのか？」

「あなたも羽入の様なものの？」

「言った通りのことだ」

俺の言葉に梨花は首を傾げた。

何を言っているのか分からなかったのだろう。

今度は羽入がこう言った。

「陸は僕の夫『古手 陸』の生まれ変わりなのです」

三話 大石刑事と陸の推理対決（前書き）

こんにちわ

気が向いたので連続投稿です。

ちよつと大石さんの扱いが雑ですが気にしないで頂けると嬉しいです。

（大石ファンの方ごめんなさい……）

それと陸はゲームのキャラなのですが少しゲームのキャラから離れてますね……

相当黒いです。

では、始まりです。

三話 大石刑事と陸の推理対決

教室

羽入が俺の正体を言った後梨花はしばらく呆然としていた。そして一言『私を助けて』と言った。

俺はその言葉に梨花に抱きついて答えた。

「絶対に救わないとな……」

俺は誰にも聞こえない様にそう呟いた。

俺は羽入を守るために力を付けた。

だけど、その力は羽入を守るためだけの力じゃない。

目の前で助けを求めている人を救う為の力だ。

「陸！授業終わったよ！」

「え？」

見ると各々が帰る為の準備を始めていた。

深く考え過ぎたか。

「俺帰るわ」

これ以上学校に居てもすることが無い。

そう思っただけ席を立った。

すると……

「ちょっと待った！」

そう言って俺の前に魅音は仁王立ちした。

「何だ？」

「陸には部活に参加してもらおうよ！」

「部活？」

何の部活だろう？
少し気になる……

「我が部はだな、複雑化する社会の中、活動毎に提案されるさまざまな条件下、時には順境。あるいは逆境からいにかにして……」

恐らくそれは部活の域を超えていると思う。

社会だのなんだのは一介の中学生がどうこう出来る物ではない。

「つまり部活で遊んで楽しむ部活なのです」

さっきまでの演説の存在意義を説明してほしくなった。

「さて、どうする？」

因みに羽入は入るってさ」

「羽入も？」

「あうう……」

羽入は顔を赤くしながら頷いた。

どうやら本当らしい。

羽入が入るなら入らない理由は無い。

「分かった入る」

「言つとくけどうちの部活は勝つ為なら何でもやるよ？
それにあげつない罰ゲームもあるしね」

「何でもか？」

「うん。何でも」

魅音はそう言いながらニヤけている。
勝てる気満々のようだ。

だが、何でもやるなら勝つのは俺だ。
俺を誘ったことを後悔させてやる。

「今日は、何をするんだ？」

「誰でも分かるジジ抜きだよ」

「分かった」

さあ、始めよう……

「上がりだ」

そう言つてカードを捨てる。
これで俺の三連勝。

皆は目を丸くしている。

「そんな……わたくし達が勝てないなんて……」

「陸くんすごい……」

「陸、一体何をしたんだ……」

この程度チヨロイな……

「さて、次は『古代君、前原君、お客さんが来てますよ。昇降口に行ってください』分かりました！
しょうがないな……圭一、行くぞ」

「ああ、皆先に進めててくれ」

「うん、分かった」

俺達は昇降口に向かって歩き出した。

昇降口

「んっふっふっふっこんにちわ。
興宮署の大石と申します」

警察か……俺ちょっと嫌いなんだよなあ……

「何の用ですか？」

あらかじめ言っておきますが職務質問や任意同行ならばこちらには拒否権がありますよ」

少しツンケンした言い方になってしまったが俺が言っていることは事実だ。

実際今まで警察絡みのことは法律の穴を潜って避けて来た。

「少しお話をするだけですよ。
なあに、取って食いやしません」

ちっ、面倒な奴だ……

「それより私の車に行きましょう。

ここは暑くて暑くて……

あ、でも私の車は冷房効き過ぎてますので寒かったら言うてくださ
いね」

こいつの車に行ったら逃げ場が無くなるな……

ここは……

「いえ、ここで話しましょう。

それとも……」

俺はゆっくりと大石と名乗った刑事に近寄りこつ言った。

「この学校の誰かに聞かれたら不味いことを話すんですか？」

「っ！」

効いてるな。

恐らく心の中では『嫌な奴だ』とでも思ってたんだろう。
主導権はこちら側にある。
このまま攻めさせてもらうぜ。

「あなたが話そうとしたのは雛見沢連続怪死事件のことでしょう？」

「お、おい！陸、何だよそれ！」

知らなかったか。

まあ、俺も羽入から知らされたんだけどな。

「五年前この村にはダム建設計画があつてな。

村人は総出で反対したんだ。

それからしばらくしてダム建設の所長が死んで、その主犯が一人消えた。

一年後には古手神社の……つまり梨花の父親が死んで、母親が消えた。

二年後にはダム賛成派の……紗都子の父親が死んで、母親が消えた。
三年後には紗都子を虐待していた紗都子の『何で知ってるんですか！？』はい？」

「え？」

「俺はね『三年後紗都子を虐待していた叔父が興宮に行った』そう言おうとしてたんですよ？」

地雷を踏んだな。

大石さん。

「っ！」

「どうやら叔母が死んでいたようですね。そして、北条悟史が行方不明になったと。圭一因みに全ての事件が綿流しって言うこの地独特のお祭りの日なんだよ

で？あなたは何を話そうとしているんですか？」

『あくまで冷静に

主導権を握ったまま話を聞け。

じゃないと主導権を奪われる』

頭の中でそう言う命令が発令される。

その命令に逆らうつもりはない。

「私はその雛見沢連続怪死事件の犯人を園崎家だと思っています。

ですから『スパイをしろってことですか？』っ！」

「園崎家は犯人じゃないですよ」

「……何を証拠に？」

「まず一年目ですね。

これは簡単です。

犯人が主犯以外捕まったことです。

何で捕まったんでしょうね？

園崎家が犯人なら匿うでしょう？

取り調べで『園崎家が犯人だ』なんて言われたら困りますから。次に二年目のダム賛成派の事件ですがこれはおかしいんですよ。だって、展望台から落としたんですよ？

もしかしたら奇跡的に助かるかもしれないじゃないですか。そんな回りくどいことは普通しません。

園崎家ならば普通に一人殺し一人を崖から落とすでしょう。

次に古手家の件の件ですがこれはこの村がオヤシロ様を狂信していることで解決できます。

この村では古手梨花をオヤシロ様の生まれ変わりとして崇めています。

その古手梨花は両親が居ません。

人間にとってそれは相当の苦痛です。

例外もありますが彼女は今は少女です。

精神的につらいでしょう。

オヤシロ様の生まれ変わりである少女に苦痛を与える様なことをしますか？

四年目ですがこれもまたおかしいんですよ。

何で間に古手家が入ったんですか？

普通なら排除すべき北条家はさっさと排除するべきですがこの事件はそうではありませんでした。

さて、ここまでで何か質問は？」

長く喋ってから口が疲れた……

「あなたは一体何者ですか？」

「私は只の学生です。

行くぞ、圭一」

俺達は教室に向かって歩き出した。

廊下

「なあ、本当に良かったのか？」

教室に向かう途中に圭一がそんなことを言い出した。

「園崎家が連続怪死事件を起こしてるって奴か？」

その問いに圭一は頷いた。

「なら、見ろよ」

丁度教室の扉の前に着いたので俺は扉を開いた。
そこには魅音達が楽しく笑っている光景が広がっていた。

「魅音のあの笑顔を見てまだ彼女を疑うか？」

その問いに圭一は首を横に振って見せた。

「なら良いじゃないか。
皆！帰ったぜ！」

「遅いよ！早く早く！」

「ほら圭一、行くぞ」

「応！」

俺は魅音達を絶対に疑わない。
そう……絶対にだ。

四話 部活での報酬

「うつ……屈辱的ですね……」

「俺が何でこんな恰好を……」

「はう……恥ずかしいよぉ……」

ふっ、敗者の遠吠えが気持ち良いなあ……

部活の結果だが結果的には俺が勝った。

それで全員巫女服だ。

デザインとしては俺がかつて羽入に着せられなかった大きく開いた胸元に

股の下ギリギリの袴に背中の中線まで見える開き。

正に勝者に与えられる最高の眺め！

まあ、全部イカサマをして勝ったんだけどな。

「陸、一体何したのさ……」

「ばらしても俺の勝ち揺るがない？」

それで俺が罰ゲームだ。

とか言われるのは絶対に嫌だ。

着せるのは良いが着るのだけはごめんだ。

「……分かったよ。」

説明して」

「分かった」

俺は頷いてカードを捨て山の中から一枚カードを適当に拾う。
ダイヤのエースとクラブのエースだ。
俺はそれを見せる。

「覚えた？」

「うん」

俺はその返事を聞いてカードを裏返す。
位置は変えていない。

「ダイヤのエースを引いて」

「え？簡単だよそんなの」

魅音はそう言いながらカードに向かって手を伸ばす。
そしてカードを抜いた。
そう……クラブのエースのカードを。

「え！？何で！？おじさんはちゃんとダイヤのエースを……」

「ふっ、これが俺の技だよ」

そう言いながら俺は魅音からダイヤのエースを受け取り二枚のカードを表にして持つ。

「ネタばらしだ。」

もう一度ダイヤのエースを抜いて」

「分かった」

魅音は頷いて手を伸ばす。

そして今度はネタばらしだから分かりやすいようにする。

「あ！」

気付いたか……

俺がしたのは簡単なこと。

相手がカードを抜く前にカードの位置を逆にしただけ。

「そんな……でもさ、それって二枚以上だときつくない？」

「そこは慣れ。」

何回もやってると上手くなるから」

そう言つて俺は三枚カードを引いて見せる。

ダイヤの2、スペードのエース、クラブのジャックだ。

位置関係は右端からダイヤのエース、クラブのエース、スペードのエース、ダイヤの2、クラブのジャックと言う感じだ。

そして俺は指を上手く使つてダイヤのエースとクラブのエースの位置を上手くすり替えた。

「すごい！すごいよ！陸君！」

「みい 多分陸は将来カジノ潰しつて呼ばれる様になるのです」

「もう幾つか潰したよ？」

「「「はい？」」」

「ほら、圭一、ニューヨークにある（某カジノ店）って知ってる？

三年前潰れた」

「ああ、会員なら子供も入れるんだよな。
確かたった一人の子供に潰されたって……まさか！」

「ああ、俺会員でさ
暇つぶしに入ったら潰しちゃった」

俺は悪くない。

あそこのディーラーが弱いのが悪いんだ。

「「「……………」」」

あ、やばい……

空気がおかしくなった……

よし！ここは羽入をからかうか。

「それより羽入！

やっぱり似合うじゃないか！」

ここで俺は言っちゃいけないことを言ったことに気付く。

真面目にヤバイ。

頭の中で警鐘が鳴る。

でも、もう遅いだろうな……

「やっぱり似合う？」

陸、あたなは私がこんなハレンチな服が似合う様な服だと思ってい

たのですか？」

冷や汗が次から次へと流れて行く。俺は
ゆっくりと後に下がる。

でも、それは逆に羽入の炎に油を注ぐ危険なことだっ
て忘れていた。

「陸、どこに行こうとしているのですか？」

ヤバイ……

危険だ……

皆！助けてくれ！

そつ念を送つて皆を見る。

「ガクガクガクッ！」

皆震えてるね。

気持ちは分かる。

分かるけど……助けて？

「ふるふるふるっ！」

うそ……皆助けてくれないの？

仲間じゃないの？

そんなことを思っている間にも羽入はゆっくりと近づいてくる。

「陸、何か言い残すことは？」

くっ！

このままじゃ俺の命がやばい！
奥の手を使うしか……

くそ！

「羽入！愛してる！」

「え？」

「俺は羽入を愛してる！」

あゝ言ってるこっちもさりげなく恥ずかしい……

「な、何を言ってるのですかもう……

ボクもなのです……」

よし！何とかなった！

「こ、今回だけなのでしょ？
今回だけ許してあげるのです……」

そう言つて羽入は帰る準備を始める。
それに俺のバックも持ってきてくれた。

「か、帰るぞ！羽入」

「はいなのです……」

俺がまいた種だけどやっぱり恥ずかしい……！
家に帰る間もずっと目を合わせられなかった……

五話 陸と羽入と詩音との邂逅

皆、陸だぜ！

皆知ってると思うけど俺は羽入の夫の生まれ変わりなんだ。
だから俺には羽入の手料理を食べる権利があると思うんだ。

でもな、何故か今俺は羽入と一緒にエンジェルモートとか言うファミレスで晩飯を食べてるんだ。

おかしくないか？俺達一緒に暮らしてるんだぜ？

晩飯は普通手料理だろ？何でファミレスなんだ？

鬱になりそうだ……

そしてその羽入はと言うと……

「あうゝ！おいしいのですゝ！」

さつきから美味しそうにシュークリームを食べている。

こいつ、いつか太るんじゃないか？

でも、こいつの幸せそうな顔を見てると注意する気力が無くなるんだよなあ……

「あうゝ」

ああ……ホント可愛い……

……はっ！危うくのまれるところだった……

「羽入、そろそろここに来た理由を教えてくれないか？」

「あう？」

「『あう？』じゃない。」

甘い物が食べられるからとか言う理由だったら……」

「だ、だったら？」

「今夜は覚悟してもらわなきゃならないな」

「あう！／＼／＼違うのです！／＼／＼」

「なら何だ？」

「『惨劇』絡みなのです」

羽入はそう言いながら真面目な顔をする。
俺もその雰囲気以身構えた。

「魅音には実は双子の妹の詩音と言う人が居ると言うのは説明した
と思うのです」

「ああ、それで？」

「その詩音と言う子惨劇の種になりかねない子なのですよ」

「……詳しく聞かせろ」

羽入は俺の言葉に頷き説明を始めた。

詩音は紗都子の兄である悟史に恋をした。

だが、彼は北条家の人間。

それは許されぬ恋だった。

そんなある日悟史は警察に叔母の事件の件で話を聞かれることになる。

詩音は禁じられているにも関わらず自らの身分を明かし悟史を守った。

結果としては悟史は守られることになるが詩音は爪を三枚剥がされることになった。

ここは全ての世界で共通のこと。

ここからは世界によって違うが詩音が惨劇の主人公の世界だとある日の部活で圭一がレナにぬいぐるみを渡してしまう。

その時魅音に『魅音にはこんな可愛い物は似合わないよな!』と言ったらしい。

その言葉は魅音の心に大きな傷を作ってしまった。

そして魅音はそれを詩音に相談する。

詩音はそう言う相手が居ることに嫉妬する。

その結果どんな悟史への感情が暴走し園崎家に犯人が居ると思い始め復讐を始める。

そして魅音、圭一、紗都子、梨花、村長、祖母を殺し最終的には自殺する。

そついう世界があつたらしい。

「成程……でもよ、そう言うことなら俺は接触する必要が無いんじゃないか？」

その部活の時に圭一に人形を渡せて言つて魅音にはあんまり浮かれるなつて言えば

詩音は惨劇の主人公にならないだろ」

「駄目なのです。前の世界ことなのですが……」

この前の世界では紗都子の意地悪な叔父が帰って来て皆で協力して紗都子を救つたらしい。

その中には勿論詩音も含まれていたそうだ。

「成程な……奇跡は皆が信じないと起こらないってそういうことか」

「はい。惨劇も詩音が居ないと打ち破れないのです」

「で、ここに来て詩音に会うことにしたと。
甘い物を食べたかっただけじゃないんだな」

「当たり前なのです！」

羽入はそう言つて胸を張つた。
すると……

ガッシャアアアッン！

そんな音が鳴つたので気になって見てみると少女がオタク三人に囲まれていた。

「せつしやのジーンズがベタベタなり！早く拭くにより！」

その言葉で状況が理解できた。

どうやらあのウェイトレスにあのオタク共がわざと足を引つ掛けウ
ェイトレスを転ばせ

デザートを股間にかけてさせたと言つ訳か。

成程……充分外道だ。

「あ！陸！あの子詩音なのです！」

「何？」

確かに見てみると魅音に良く似ている。

「羽入、手荒な真似をするけど怒らないでくれよ?」

「安心するのです。」

「大丈夫なのですよ」

俺はその言葉を聞いてゆつくりとオタク共に向けて歩き出した。
そして俺はオタクに声をかけた。

「おい、下郎」

「は?何ものにやり!

お前なんかには用はないにやり!」

「まあ、俺の話聞けよ」

俺はそう言っただけでオタクの肩に右手の手の平を置く。

「しつこい奴にやり!

何度もお前に用はいだだだだっ!」

「同士!?お前!同士に何をした!」

「ただ、握力を込めて握ってるだけだけど?」

ただ俺の握力はボーリングの玉を握りつぶすくらいの力はあるけど
な。

「同士のから離れる!」

オタク……ああ！もうBで良い！

オタクBはそう言っただけで殴りかかって来る。

俺は左の手の平で拳を受け止める。

勿論左手にも力を込める。

「いだだだだっ！」

するとオタクCが動こうとしたのでそれを止める。

「動くな！動けばこのオタク二人の握っている場所を握り潰す！」

「っ！」

オタクCはその言葉を聞いて動かずに止まった。

俺は三人の忠告する。

「お前等、もうこの店に顔を見せるなよ？」

もし、俺がこの店に来てお前達の顔を見たら……」

俺はAとBを離してこう言った。

「コンドコロシテヤルカラナ？」

こう言う喋り方は疲れるけど結構効果的だ。

「……し、失礼しましたあああああっ！」「」「」

三人共一気に逃げに行った。

ま、あの程度の奴等を追い払えない訳無いけどな。

「あの……」

「ん？」

声のした方を見ると詩音が呆然と俺を見ていた。
俺は知らない様な感じを装ってこう言った。

「大丈夫か？ みお……魅音じゃないな」

「え！？」

やはり驚いているんだろう。
俺も見た限りでは髪しか違いが分からない。

「俺は古代 陸だ。」

あそこで座ってるのが俺の婚約者の古手羽入。
古手神社の古手梨花の遠縁の親戚だ」

「えっと、私は園崎詩音です」

ああ、違いが分かった。

声が若干こつちの方が高い。
本当に若干だけだ。

「よろしく。」

少し話さないか？」

「え？」

「北条悟史」

「!？」

その言葉に詩音は反応した。
やっぱり詩音は悟史が好きだったんだな。

「北条悟史のことを話さないか？」

「……あなた何者ですか？」

「オヤシロ様が惨劇を食い止める為に使わした遣いだ」

「はぁ？」

その反応は『こいつ何言ってるんだ？』 見たいな目だったけど当然だ。

「とりあえず話そう。」

あんたに取っても有益な話があるかもしれないぞ」

「はい。」

分かりました。

話を聞かせてちゃんとした話を聞かせてくださいよ」

「ああ」

俺と羽入はそれからしばらくの時間をエンジェルモートで過ごした。
詩音と話しをする為に……

六話 陸と羽入と詩音との話

羽入から聞いた話だと詩音はこの時期園崎家が悟史を消したと思っているらしい。

更に紗都子の所為で悟史は限界まで傷付けられたと思っているらしい。

その二つの誤解を解かなければ惨劇は訪れてしまう。

ならば俺がその二つの誤解を解いて惨劇を訪れないようにすれば良い。

と言うことで俺達は詩音のバイトが終わるのを待っている。

今は20:50 詩音のバイトが終わるのが21:00。

後十分待つていれば良い。

「しっかし……羽入はそんなに甘い物が好きだったか？」

確かに昔は甘い物を見ると嬉しそうな顔をしていたがここまでじゃ無かった筈だ。

一体昔からの千年の間に羽入に何があっただろう？

少し気になる……

「甘い物が好きになったのは陸の所為なのですよ？」

「俺の？」

なら羽入が太ったら俺の所為か？

何とかしないと……

「陸の作る甘い物がおいし過ぎてその魅力に逆らえなくなったのです」

「それでも太るから少しは自重しろよ」

そう言いながら羽入の口に付いているクリームを取ってやる。
羽入は少し顔を赤くしたが気にしない。

「あうう………／＼／＼／＼」

ああ……可愛い……

何て言うか……保護欲が……

「何をしているんですか？」

「おつとすまん」

気が付かなかった……

俺としたことが……次から気をつけなければな。

「座ってくれ」

俺は俺の向かい側の席を指す。

羽入はそれを見て俺の隣に移動した。

そして俺は語り出した。

「まず、何で俺が北条悟史を知っているかだ。
信じなくても良いが俺は本当にオヤシロ様から真実を聞いた」

詩音は『こいつは何を言っているんだ』と言う様な顔をしているが
構わずに俺は続ける。

「まずは確認事項だ。
まず一つ。」

お前は北条悟史は園崎家が消したと思っている」

その質問に詩音は黙って頷いた。
どうやら他の世界と同じらしい。

「二つ目、お前は北条悟史は北条紗都子が傷つけたと思っている」

その解答は肯定の頷きだった。

ふむ……ならばそれでも良いだろう。

二つの誤解を消してやろう。

まずは園崎家の方だ。

これは大石に説明したことを説明すれば良いだろうと思い
大石に説明したことを話した。

「……なら悟史君はどこに行ったの？」

これは知りたいだろう……

当たり前だ。

自分の好きな奴が行方不明になったら行方を知りたくなる。

「答えてやる。

必ず会わせてやる」

「陸!？」

羽入は驚いた顔をしている。
恐らく『東京』の件だろう。

「大丈夫だ。
何とかする」

俺の真剣な顔に羽入は結局折れてくれた。

「……分かったのです」

渋々だが羽入は頷いてくれた。

俺は羽入の返事を聞いて詩音に向き直った。

「紗都子の件を聞いてくれるな？」

「……はい」

その返事を聞いて俺は語り始めた。

「詩音、お前は紗都子が悟史を傷つけたと思っているがそんな無い。それにもしそудったとしても紗都子はその罪に気付いている筈だ」

「そんなことはありません！」

その声に周りの客は詩音に視線を向ける。

俺は詩音に座る様に手で催促する。

「あの子は罪に気付かずのうのと生きてるんです。
なのに何で気付いていると思うんですか？」

声に若干怒気が混じっているがあまり怖くない。

「なら紗都子に会いに行くか？」

「え？」

本当なら二人が解決するべきだ。
ならば、二人を引き合わせるべきだ。

「彼女と会って話をしろ。」

そうすればお互い思ってることを話せるだろ？」

「……そうですね、なら明日の放課後に分校に行きます」

「分かった。」

それと悟史の件だが明後日だ。
良いな？」

「はい、分かりました」

そうして俺達は解散して各々自分の家に帰って行った。

陸の家

今は夜中の1:00。

羽入は二階の俺の部屋で寝ている。

俺は一階の電話でとある場所にかけている。

「弘輝か？」

『どうした？陸』

「入江機関、知ってるだろ？」

『ああ、ちょっと待ってる』

弘輝がそう言うのと保留音が鳴る。

それから一分弱でその音が止んで弘輝の声が聞こえた。

『良いか？メモ取れよ』

「ああ」

そう言われて俺はメモの用意をする。

『行くぞ、入江機関は雛見沢症候群を研究、ならびに治療の方法を見つける為の機関だ。』

少し前までは軍事利用も考えられてたけど小泉ってお偉いさんが死んだ所為で軍事利用はされなくなっちゃったらしい。

元々雛見沢症候群自体が危険な病ってことで研究を反対されてたけど小泉は反対派の声を抑えてたらしい』

「つまりあれか？小泉は入江機関のパトロンだったのか？」

『ああ、実は入江機関の中に鷹野って奴が居てそいつと個人的交流があつたらしい』

「そうか、分かった」

メモを取るのが大変だった……

「それと入江機関に圧力をかけて欲しいんだが……」

『おう、良いぞ。』

どんな風にかければ良いんだ？』

「『一瞬で潰されたく無かったら村人のとある一人の住人を北条悟史に会わせる。』

無論俺も同行させる』」

『北条悟史って確か治療薬の検体だろ？』

「ああ、色々あつてな。

明後日だ」

『了解。』

圧力かけとく。

お休み〜』

「ああ」

俺はそう言つて受話器を置いた。
本当に持つべきなのは良い友だ。

「さてと……寝るかな」

もう眠くなってきた……

俺は二階に上がって羽入の顔を見ながら眠った。

第三者視点

入江機関

「どうすれば……」

入江は悩んでいた。

その原因は先程東京からかかってきた一本の電話だった。

『今すぐあなたの機関を潰されなくなかったらある一人の住人を北条悟史に会わせろ。』

その地に居る一人の男も同行する。日時は明後日だ』

まさか、東京がこんな電話を寄こすとは彼は思っていなかった。この研究は完全に秘密裏で行われている。それを東京が敗れと言ったのだ。

しかも命令からして断ればこの診療所は潰される。もしそうになったら……

「悟史君……紗都子ちゃん……」

難見沢症候群で苦しんでいる二人が最悪の死に方をしてしまう。それだけは避けなくてはならない。

「受けよう……」

それが彼女達の為になる……

入江はそう考え目の前に居る悟史の病室のガラスに手を付けた。

七話 詩音と紗都子との邂逅

六月七日

今は授業が終わり放課後。

詩音が来るまで皆を待たせている。

「ねえ、陸。

一体何で皆を待たせてるの？」

これで魅音からのこの質問は十回目。

「何度も言わせんなって……

待ってれば分かるって言ってるだろ？」

こう言っても魅音は飽きずに質問してくる。

実は俺はさっきから汗を掻いている。

詩音が何をしだすか分からない。

「はあ……」

それにしても遅い……

もう十分は待ってる。

何かあったのか？

そんなことを思っていると……

「来たか……」

「え！？」

「みいちゃん!？」

「魅音!？」

「魅音さん!？」

詩音が来た。

詩音は一人男を連れていた。

その男を見て俺は荒事に慣れている様な男。

顔にサングラスをかけている為目は見えないが恐らくそのサングラスを外せば

鋭い目が見えるだろう。

「詩音!？何でここに!？」

魅音はそう言って詩音に近づこうとする。

それを俺は言葉で遮った。

「俺が呼んだんだ」

「どうして？」

「その人はオヤシロ様の遣いらしいですよ」

冗談で言ったのに真顔で言われたら否定できないじゃないか。
実際はオヤシロ様の夫だし……

「良く来たな、詩音。」

でも、後の人は誰だ？」

俺がそう聞くと大男は頭を下げてお辞儀をする。

「葛西辰由と申します。
詩音さんの付き人です」

葛西辰由？どこかで聞いた様な……まさか！

「散弾銃の辰！？」

散弾銃の扱いにおいてはまさに右に出る者はいないと謳われた伝説の男！？

園崎組に所属しているとは聞いていたが……実際に会えるとは……

「もう現役は引退しています。
お忘れください」

「は、はい。」

古代 陸と申します」

俺はそう言つて礼をする。
危うく吞まれるところだったぜ……

「で、陸さん。」

この子が紗都子さんですか？」

詩音は紗都子の近くに居た。

俺はさりげなくを装つて紗都子の後に移動する。
それと同時に葛西さんも詩音の後に移動していた。
やはりこの男は本物だ！

殺気が痛い……！

「ああ、そうだよ。」

紗都子、こちらは魅音の双子の妹さんの園崎詩音さんだ」

「は、始めましてですわ」

そう言っただけで紗都子は戸惑いながらもお辞儀をする。

俺はと言うと詩音が武器を持っているかどうか探っていた。

詩音はナイフを持って葛西は拳銃を一丁持っている様だ。

俺は丸腰なんだけどな……

ま、しょうがないか……

「回りくどいのは嫌いなんで単刀直入に聞きますね」

詩音がそう言うのと周りの空気は本当に重い物になった。

そして、その空気の中詩音はこう言った。

「悟史君が消えたのはあなたの所為だって分かっています？」

詩音がそう言った瞬間圭一達が何か言おうとしたが俺は目でそれを制した。

この場合は詩音と紗都子が解決するべきだ。

だが、詩音が紗都子に何かをしようとした時は…… 勿論容赦しない。そんなことを思っていると紗都子は一度少しだけ目を瞑って得こう答えた。

「はい、分かっていますわ」

「え？」

詩音は俺の言っていたことを信じていなかったんだろう。

驚いた顔をしている。

「私にはいいーにいいーの後でずっと隠れていました。それがにいいーにいいーのことを傷つけていた……それは気付いていました。」

だから……あなたがもし、私のことを恨んで殺したいと言っんなら

……

何の抵抗もいたしません」

その顔は覚悟を決めた表情だった。

紗都子は俺の方を向き目で俺に指示をした。

『私を守らないで』

本当にそう言ったのか分からない。

だけど……俺の頭の中でそう言った紗都子の声が聞こえた。そんな気がした。

でも……

「詩音、紗都子を殺したら俺はお前を殺すぞ」

「陸さん!？」

「紗都子、思い出してみろ。」

お前の兄貴は優しくかったんじゃないのか？」

俺は羽入から悟史の優しさを聞いて知ったんだ。

悟史が本当に紗都子のことを大切に思っていたことも……

そんな悟史が大切にしていた紗都子を傷つける奴は絶対に許さない！

「詩音、悟史は消える前にお前に『紗都子のことを頼む』って言ったんじゃないのか？

お前は頼まれてたのに紗都子を傷つけるのか！？
傷つけると言うんなら俺を殺してからにしろ！」

「う、うわあああつ！」

詩音は叫びながら隠していたナイフを取りそのナイフを俺に向かつて斬りかかった。

だがそのナイフは俺に届かなかった。

「やめましょう、詩音さん」

止めたのは詩音の付き人、葛西辰由。

葛西は手の平でナイフの刃を握っていた。
その手からは血がドンドン流れ出ている。

「か……さ……い？」

「この少年は守ると決めたら絶対に守ります。
彼が守る時で戦う時は私ですら勝てません」

「……あなたもすごい意志の持ち主ですね。
出来ればあなたとは戦いたくありません」

「ふっ……詩音さんは私が説得しましょう。
失礼します」

葛西は血が流れていない方の手で詩音を引き摺って出て行った。

「すごい奴だ……」

俺はそう呟きながら葛西の出て行った出口を見ていた。

八話 仲良し？姉妹

六月八日

どうしてこうなったんだろうな？

俺は確かにこうなることを望んだぜ？

でもさ、物事には行き過ぎってこともあると思うんだ……
え？何のことか分からない？

なら、見てくれ。

俺が頭を抱える理由が一瞬で分かるぞ。

「嫌ですわー！ー！」

「紗都子！ちゃんと南瓜を食べないといけませんよ！」

こう言うことだ……

今は昼飯時。

何故かいきなり詩音が来て紗都子の前に重箱（いん 紗都子の嫌いな野菜）を紗都子の前に置き

『悟史君からあなたことを頼まれています。
なのでまずは好き嫌いから』

とか言つて無理矢理野菜を食べさせている。
見ていて少し可哀想だがまあ、良いだろう。

詩音は紗都子の為を思っているので誰も詩音を止めない。

若干何名か（部活メンバー殆んど）は面白そうに紗都子を見ている
が放っておく。

「詩音、一昨日の約束忘れてないよな？」

「はい、当たり前です」

悟史のことは口止めしている。

もし、言えば紗都子も会いたいと言い出すだろう。
それは流石に不味いからな。

「さてと、そろそろ弁当の時間も終わりだ。
部活だ！野郎共！」

「「「おおおおおっ！」「」」

案外アドリブでもついてきてくれるんだな。

校庭

「今日は鬼ごっこだよ！」

「よし！絶対勝ってやるぜ！」

「俺が鬼だったら圭一は絶対負けるけどな」

「何を！」

「良い雰囲気じゃん？
ほらじゃんけんするよ！」

「『最初はグー！じゃんけんポン！』」

各々出した手はこうなった。

俺グー

羽入グー

魅音グー

紗都子チヨキ

梨花グー

レナグー

特別参加の詩音グー

「見事に紗都子が負けたな」

一瞬で紗都子が負けるとは……

「不祥この北条紗都子が鬼を務めさせていただきますわ……」

ホントに悔しそうに言う紗都子。
少し可哀想だがしょうがない。

「やっぱり鬼が追いかけるのは百数えてからにする？」

「いや、それだと偶にズルをする奴が居るから俺の問題を解いてか

らだ。

『ある事故現場で一人の少年が血を流し倒れていた。現場には次の三つが落ちていた。

アルバム

手帳

カメラ

少年は事故で死んだか？それとも殺されたか？』

答えは梨花に教え梨花は紗都子が答えてから百秒間は捕まらない。無論百秒間の間梨花を追いかけることは禁止だ」

俺は梨花に答えを教えて離れた。

そして

「始め！」

その魅音の合図と共に各々散らばって行く。

そんな時圭一が俺の近くに寄って来た。

「お前って案外酷いのな……」

「何がだ？」

「問題文の最初で『事故現場』って言ってる？
殺されたなら殺人現場だ」

「流石」 そう言うこつた。

大抵は現場に落ちている物から解こうとするけどそんな思考じゃ解けない問題だ」

そんなやり取りをしていると

「陸さん！騙しましたわね！」

そんな声が聞こえる。

恐らく問題を解いたんだろう。

必死に俺を追いかけてくる。

「騙された恨みを……」

まあ、良いか……

圭一、ん？おい！どこに行く！」

「さらば！」

くそ！圭一を囚にする作戦が行えない！

ならば！

「え！何をする気ですの！こっちに向かってくるなんて！」

そう、俺は紗都子に向かって走り出したんだ。

人には奇襲をかけられてから何秒間か対応出来ない時間がある。

それは米軍兵士で平均十五秒。

その時間は如何に訓練しても零にはならない！

更に紗都子は兵士ではない。

部活メンバーでも彼女はトラップを得意とする。

体育会系では無く頭脳で攻める方！

そこから計算して五秒だ。

今から五秒以内に……

「ちょっ！止まりなさいませ！」

一秒……

「た、タッチしますわよ！」

二秒……

「ちょ！そろそろ不味いですわ！」

三秒……

「ひ、ひいっ！」

四秒……

「ぶつかりますわ！」

五秒！

俺は脚に全力を込めて一気に跳んだ。

そして着地地点は紗都子の後。

いくら紗都子であっても今の一瞬で通り過ぎた場所にはトラップを仕掛けられない！

「じゃあな！紗都子！」

俺はそう言いながら紗都子から離れて行った。

「きiiiiiiiiっ！絶対に捕まえますわ！」

そんな宣戦布告を受けながら。

「ふう……さて、皆どうしてるかな？」

俺は校舎の屋上に隠れていた。
見ると皆俺を探している。

「皆捕まったか……」

俺は腕時計を見る。

「後十分……」

ある意味命がけだ。
負けたら相当恥ずかしい格好をして下校しなければならない。
それだけは避けたい。

「ふむ……後七分」

考えごとをしている間に三分経った。
ここも長くは持たない。
そう思っ
て降りると……

「あ！陸君！」

「レナ！」

しまった……！見つけた！
レナに紗都子と同じことをするのは危険だ。
下手をすれば俺の脚がレナの顔に直撃する。

そう思つて、俺はレナとは逆の方向に逃げる……が。

「見つけた!」

「圭一まで!」

挟まれた……!

こうなつては……

全力を出すしかない!

俺は屋上に登る。

「レナ! 挟み撃ちだ!」

「うん!」

レナと圭一も屋上に上がつて来た。

どうやら俺は屋上で時間を稼ごうと思つてしていると推測したらしい。それはそうだろう。

いくら低いとは言え屋上から飛び降りれば怪我をする。

だが、それは常人の話だ。

俺は常人じゃない!

「うおおおおおっ!」

「な! マジかよ! レナ逃がすな!」

「う、うん!」

俺は校庭に向かつて跳んだ。だが、万事休すとはこの事。

跳んだ先には魅音達が居た。

「陸、終わりだよ」

「私達の勝ちですわ」

「みい 僕の勝ちなのです」

「梨花ちゃん、さりげなく活躍を自分だけの物にしようとしてますね」

「そう言うことなら僕の勝ちでもあるのですよ」

ふっ、そう言うことが……

「魅音、お前、圭一が一週間行方不明になってそれからいきなり『これは圭一の遺骨だ』とか言われて骨を置かれたらどうする？」

「信じないね。この目で見た物が真実とは限らないから」

「そうだな……それが正しい解答だ！」

俺はそう言っ羽入の方に走る。

「何をしていますの！？自分から！」

「羽入は良い嫁だってことを証明するのさ！」

「「「はあ？」」「」」

その場に居た全員が意味が分からず首を傾げたが俺には分かった！
つまりこう言うことだ！

「だらあっ！」

俺は羽入を拾い上げた。
そして梨花も回収。

「二人共！落とされない様にしてろよ！」

「「はいなのです！」」

「ちょ！どう言うことですよ！」

「分かりたいなら俺を捕まえろ！」

皆、分かったか？

ヒントは俺が屋上から跳び下りてから皆が発した台詞にあるぜ。
解答は次回だ！

九話 勝った理由

「『負けたあゝゝゝ！』」

そう言つて倒れ込む五人。

結果的に俺は勝った。

まあ、身体能力が違うからな。

そんなことを思っているとき、紗都子が悔しそうな顔をしながら俺に尋ねて来た。

「羽入さんと梨花は鬼では無かつたんですの？」

その五人共その問いの答えが知りたいのだろう。
皆俺の方を見ている。

俺は羽入の頭を撫でながら答えた。

「魅音、俺の質問覚えてるか？」

俺がそう聞くと魅音は『何だっけ？』と首を傾げた。

こいつは遊びのことしか頭に無いらしい。

二十分前のことを忘れてるのは相当重症だ。

「俺は『圭』が一週間行方不明になってそれからいきなり

『これは圭一の遺骨だ』とか言われて骨を置かれたらどうする？」
と聞いたんだ」

「ああ、そうだったね」

「すっかり忘れてたよ」と言いながら魅音は頭を掻いた。

本当にこいつは駄目かもしれない。

「羽入と梨花は鬼のふりをしてたんだよ」

「「「はあああああつ!?!?!」」」

五人の叫び声が鳴り響いた。

まあ、そうなることは最初から予想はしていた。

まさか二人が鬼のふりをしていたなんて思わなかったんだろう。俺は驚いている表情を浮かべている皆を見ながら説明を始めた。

「俺が屋上から飛び降りた後の羽入と梨花のセリフを思い出してみる」

「確か梨花ちゃんが『みい 僕の勝ちなのです』だよな?」

「羽入さんは『そう言うことなら僕の勝ちでもあるのですよ』でした。それが…… あ!」

紗都子は気付いたか。

流石トラップの名人と言ったところだな。

羽入と梨花の仕掛けたトラップを見抜いたか。

「何だよ? 一体何なんだ?」

圭一と魅音と詩音とレナは気付いていないらしい。

俺は少しヒントをあげた方が良くかなと思ってこう言った。

「あの状況はお前達鬼の勝ちだった。

だからあの状況では『私達の勝ちだ』そう言うべきだ。

なのに羽入と梨花は『私の勝ちだ』と言ったんだ」

分かりにくかったかな？
でも、分かるだろ。

「あ！分かったぜ！」

「レナも分かった！」

そう言つて二人は嬉しそうにハイタッチをする。
これで分かつていないのは魅音と詩音だけ。
時間の関係でもう待てない。

「締め切りだあゝゝ」

「「分からなかったゝゝゝ！」」

二人はそう言いながら悔しそうな顔をして地面を叩く。
こいつ等そんなに悔しかったのか？

「正解は！『羽入と梨花が鬼のふりをしていた』でしたゝ」

「「ああゝそう言うことかゝゝ」」

二人は納得した様な表情をした。
まあ、納得してくれないと自分のヒントを出す才能を疑うところだ
つたぜ。

まあ、そんなことより……

「皆、罰ゲームの準備は良いか？」

「「「ギクッ!」「」」

どうやら逃げられると思っていたらしい。
こいつ等やっぱバカだ。

「さあゝて、罰ゲームを楽しもうかあゝ?」

「「「きゃあああああつ!助けてえええええつ!」「」」

その後罰ゲームとして『メイド服着用で校長先生の頭を撫でる』と
言う罰ゲームをした皆は仲良く包帯をして帰った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0712y/>

ひぐらしのなく頃に～皆守り編～

2011年11月17日19時16分発行